

主人を召集されて身一つで逃げてきた人が多く、水を得てのんでやっとたどり着く。

日ならずして官舎は満杯になり、(約二百人ぐらい)毎日食料の調達にたいへんでした。官舎は避難民収容所となり、ソ連軍の兵隊が、一戸に常駐、監視にあたってました。老人、女、子どもは南下させるが良いと司令部に交渉、日をへてチチハルへ三十人ぐらいずつ送り出しました。

チチハルにおける難民生活は、二十一年八月の引揚げまでの間、誰もが栄養失調におちいり、弱い人はつぎつぎと亡くなり、加うるに、発疹チフスが流行し、子どもはほとんど死亡。おとなでも、体力の無い人は亡くなり、おたがい、自分の命を守るのに精一杯、どうすることもできなかった。一年間着たきり、風呂にはいることすらできない。暑い日に洗濯して干し、またそれを着る。二十一年の三、四月頃は毎日誰かが葬られました。

八月十六日、私が社宅を見まわりに行ったとき、社宅の扉はこわされて、部屋中無残なありさまでした。押入れのふとん、衣類、全部が荒らされて、天井裏までこわ

されていました。満州全体、あらゆる街が泥棒市場で、日本人の衣類がはらんし、売買されていました。

十五歳の開拓義勇軍勇士

大阪府 田口 久太郎

昭和十七年、国民学校高等科在学中、先生から満蒙開拓青少年義勇軍のことを聞かされ、北辺の鎮護、食糧の増産、国にご奉公ができることがあればと思つて、親の反対はあつたが、将来の安定を考えて志願した。学校では、先年にも義勇軍を送出しており、当時学校から、同期五人参加したと記憶している。当時私は満年齢十五歳だった。学校では壮行会を開いて、出征兵士を送るのと同じように、日の丸の小旗を打ち振り、盛大な見送りを受けて、義勇軍訓練所のある茨城県内原に出発した。内原訓練所に、大阪から一個中隊、三百余人で入所し、満州開拓に必要な訓練を受けることになった。開拓に行くのだから農業に関する訓練、開墾、松の根っこ起し、

堆肥運搬と大阪の子どもにはまったくたいへんな仕事だった。精神教育は大きなウエートを占めており、剣道は直心影流の太い丸太棒のような木刀を、頭上から一気にハァーと振り下ろす。宿舎は、丸木小屋で真中に一本柱が立っており、傘のように組まれ、屋根が作られていた。通称日輪兵舎と呼ばれていた。訓練はすべて軍隊式に編制していた。ここで約三か月の訓練が終わり、十七年六月、昌図訓練所に現地訓練を受けるべく渡満。ここには四個中隊が入所するが、そのうち、一個中隊が一年先輩、あとの三個中隊はたいへんにじめられた。われわれの中隊は黒河省嫩江縣泥秋というところへ移動した。一日に列車が一本停車のところだった。冬は零下三百度、四十度となったこともある。凍傷が直接の原因で死亡した同僚も出た。食糧はとぼしく、宿舎とて土レンガを積みあげ、草で屋根をふいたもので、オンドルもベチカも不完全で、すき間から煙が出る始末で、どんどん火を焚けばススが出たり、火災になったことも二度あった。

昭和二十年、やっと寒さにもなれ、多少とも農業がわ

かりかけてき、三年間の訓練は終わりを告げ、開拓団として移行する先は、稲作（水稲）のできる所と、いうことで、東安省宝清縣頭道に、義勇隊開拓団として、第一次入植している完達嶺（山脈）もこえた三江平原と現在いわれている地域に入植した。ところが、この開拓団は、男手はすべて兵隊に行つて、女、子どもたちはばかり。昭和二十年八月九日、私達は人手のない部落、近隣の開拓団の応援に出ていると、銃器と衣類を持って全員本部に集合と命令が下つた。ソ連軍の満州侵攻だった。婦女子、老人を囲むようにして開拓団、農耕地、すべてを捨てて逃避行となつた。後方からはソ連軍が戦車を先頭に、トラックに満載の兵士を乗せ、われわれに迫る状況がたつたわってくる。婦女子はもとより、われわれ若いものは飢えと疲労で落伍者が続出、といつてもその人達を収容できず、通常の道路は進めず、山の中に入り、くらがりを待つて行動する。川が増水して流れは早く、しかし渡らなければ進めず、老人、子どもは、遂に濁流にのまれ押し流されていく。

山中で、目前の道路をソ連軍が道路脇に兵を配置し、

トラック、戦車が侵攻する、そんなおり乳飲み子が母親に乳をねだる。「敵に見つかると、泣かすな、なんとかせい」と乳のみの子の母に制する声。子を見ればグツタリ。

二、三人で部落にはいって行く。何発か銃声があった。

行ったら彼らは帰ってこない。夜日をついで、このようなことのくり返して、木の根元には子どもが置かれていたりした。地獄絵の中をくぐり、青山、林口を横目に見て、二道河子でソ連軍に武装解除された。牡丹江を通り、梅林で婦女子、子どもと分けられ収容され、しばらくして拉古の収容所に移された。たべ物は、あき缶に米、高粱の粥ともご飯ともつかないものをスプーンで分けて空腹をいやした。

二十年の九月末日、貨車に立ちづめ、身動きのできない状態で十月二日、新香坊の駅に降ろされ、ハルビンの街に行き、日本人会のお世話になる。銭湯に入れて貰ったことが今なお、脳裏に残っている。ハルビンでは寒く、少しでも南下したいと考え、新京に行く列車にまぎれこみ南下した。新京では人びとの好意で一冬なんとか越し、昭和二十一年十月やはり学歴（学問）を思い、夜間

学校に行くことにして、給仕のようなことから始まった。

長男の死、長女今もカリエスの身

鳥取県 森原敏直

満州事変当時、国策の一環として、満州国建国の一翼をになうことは、男子の使命であり、本懐でもあった。

私もその一人として、昭和八年十二月、現地除隊するやただちに、あこがれの満州国政府に奉職したその頃、満州国は順風満帆の勢だったが、大東亜戦争に突入してより、情勢必ずしも順調ではなく、特に昭和二十年に入るや、戦況もいよいよ緊迫し、世相はにわかに騒然としてきた。はたせるかな。八月八日頃から、軍をはじめ、有力団体家族が、先をきそって疎開するにいたった。

満州国政府も急ぎよ、非戦闘員で希望する者を安全地区に疎開させることに決し、各都ごとに団体を編成し、八月十一日から新京を離れたのである。